

# 長崎県五島の出郷者の会について

田 島 康 弘

(2006年10月18日 受理)

Emigrant Voluntary Associations from the Goto Islands of Nagasaki Prefecture

TAJIMA Yasuhiro

## 要 約

長崎県の離島、五島列島福江島出身者の都市部への転出の状況や、都市部での居住、集団形成状況、さらにこの集団の活動等について、三井楽会を中心に検討した。

その結果、次のことがわかった。

1. 都市部での集団形成状況では関西三井楽会が最大で、1,000人程の会員がいること。
2. 母村では、カトリック教徒の農業集落からの離村者が多かったこと。
3. 大阪での居住の中心は、戦後繊維産業に職を求めて移住した泉南地方に現在も多いこと。
4. 長崎三井楽会に見られるように、会が中学校の同窓会と一体化している場合は、より強い力を発揮しうること。
5. 長崎県五島の会は地縁的結合を中心としているのに対し、奄美の出身者の会は地縁とともに血縁的な結びつきがより強いように感じられること。

**キーワード**：離島出身者、カトリック農業集落、泉南地方、関西三井楽会、地縁血縁

## 目次

### 第1章 研究目的

#### 第1節 問題の所在

#### 第2節 研究目的と方法

### 第2章 旧三井楽町の人口動態

#### 第1節 統計から見た人口動向

#### 第2節 出郷者の全国的状況と

##### 各地三井楽会の成立

#### 第3節 五島人会について

### 第3章 全国の三井楽会について

#### 第1節 関西三井楽会

#### 第2節 東京三井楽会

#### 第3節 福岡三井楽会

#### 第4節 長崎三井楽会

### 第4章 まとめと考察

#### 第1節 まとめ

#### 第2節 奄美の会との比較

## 第1章 研究目的

### 第1節 問題の所在

2004年12月、筆者は長崎県五島列島の福江島を訪ねた。鹿児島県の離島である奄美の出身者が、日本の大都市部で作っている郷友会と呼ばれている出身者の会=組織が、長崎県の離島ではどうなっているのかを知りたかったからである。

一般に、大都市部で作られているこうした会は、離島や山村部の出身者によって、よく作られていると言われてきた。

奄美や沖縄に関しては、いくつかの書物も出され、また、筆者も都市部および出身地である郷里=母村、双方での現地調査なども行ってきたので、ある程度その実態を知っているつもりであるが、日本で離島の数が最も多く、離島人口も多い長崎県の離島出身者については、東京や大阪の長崎県事務所でその存在について尋ねた事はあったが、これまで手掛りとなるような情報を得た事はなかった。

どうしても長崎へ、それも離島それ自身の中へ行って見ないと手掛りが掴めないだろう、とここ十数年前から考えていたが、今回ようやくこうした機会を得る事ができた。

まず、長崎県庁の情報センターでこの件について尋ねたところ、秘書課に回され、ここでは県人会なら東京、関西、東海、福岡にあるが、それより小さい市町村レベルの会については、あるかないかもほとんどわからないという話であった。

また、県立図書館へも行き、長崎新聞社にも問い合わせたが、手掛りは全く得られなかった。

そこで「とにかく現地へ」と思い、福江島に渡り合併した五島市役所で尋ねたところ、総務課で石城会ならわかるが、これ以上はわからないという事であった。石城会とは県立五島高等学校の同窓会のことで、この高校がかつての石田城の城内に建てられていることから「石城会」の名がついているのである。この石城会なら東京や大阪にあり、それぞれの総会の際に市長が行くこともあるが、旧福江市出身者のような地域出身者の会については、わからないということであった。ただ、そのあと「三井楽会というものがあるようだ」と言われた。

そこで筆者はこの一言を手掛りに、島の西端旧三井楽町の庁舎をたずね、総務課のS氏から、ようやく三井楽会の存在や各地にある三井楽会の概要を聞くことができたのである。

数日後、長崎市に戻り、長崎市三井楽会の前会長氏に面会し、さらに詳しい情報や資料を得ることができた。

本報告は、以上述べたような問題追究の経過をへて、これらの経過の中で考えたことや収集した資料等を基に、整理しまとめたものである。

### 第2節 研究目的と方法

以上述べたように、本研究の目的は、

- 1) 長崎県離島出身者の出郷状況やその移住先、またこの移住先での集団形成状況の実態、等を捉えることであり、
- 2) この結果を奄美の場合と比較、検討することである。

研究の対象として、長崎県福江市三井楽地区（南松浦郡旧三井楽町）をとりあげる。その理由は、前述のごとく「出身者の会」について把握する最初の手掛りとなった会だからである。

筆者は三井楽会の存在を現地でたまたま知ることになったのであり、ということは他にも出身者の会が存在する可能性は十分にあるということだろう。筆者が知らないだけかも知れない。

事実、その後、福江市の図書館で閲覧した1文献で、久賀島会の存在を知ることになった。<sup>1</sup>

また、「三井楽町郷土誌（昭和63年度～平成15年度版）」の第4章教育第6節人材育成の中の長崎県大阪事務所の業務の部分（p.310）で「その他に県人会、町人会、同窓会の支援である。」とあって、町人会という言葉が使われている。これは、三井楽の他にも旧町単位で出身者の会が作られていることを予測させるものと言える。<sup>2</sup>

そして、旧三井楽町役場での聞き取りからも、関西に福江島の岐宿、玉之浦、富江の各町と奈留島の奈留町の会があること、また、奈留会は東京にも存在することがわかった。但し、福江島の福江市の会はないようである。これは、前述の石城会が福江市の出身者の会の役割をも果たしているからかも知れない。なお、三井楽を含む福江島の他の4町の会も、各町の中学校の同窓会をほぼ兼ねていることに注意しておきたい。<sup>3</sup>

## 第2章 旧三井楽町の人口動態

### 第1節 統計から見た人口動向

出郷者の会の存在は、母村からの人口流出を前提としている。そこで、旧三井楽町の人口流出の動向を、統計から押さえておきたい。幸いにも「三井楽町郷土誌」（昭和63年度～平成15年度版）には、近年の人口移動関係の統計が載せられているので、主にこれに依拠して話をすすめたい。<sup>4</sup>

戦後の旧町単位での人口の推移は、1955年をピークに減少の一途をたどっており、とくに1965年～75年の間で減少率が高い。また、その後も減少を続け、今日でもこの傾向は変わっていない。

（図2-1）

かくして、1955年に1万人を越えていた人口は、2000年には4,000人程度となっており、単純な計算でもこの差の約6,000人が町外に転出したと予測される。

次に、産業別人口動向を見ると、何といっても農業人口の減少が目立つ。（図2-2）

すなわち、1965年の約1,800人から2000年には200人台（218人）へと激減した。これに対して水産業人口はさほど減少しておらず、この他、建設業、卸・小売業、サービス業、公務なども大きな変化はないと見ることができよう。

図 2-1 旧三井楽町の人口の推移

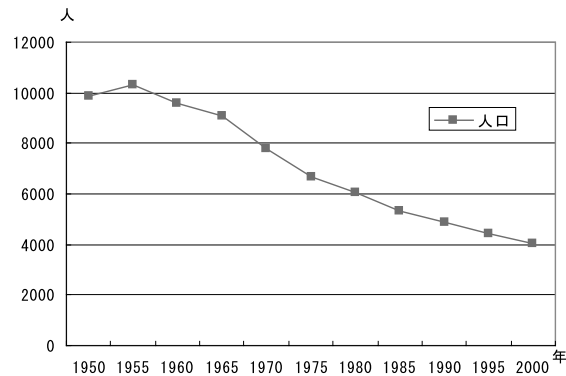
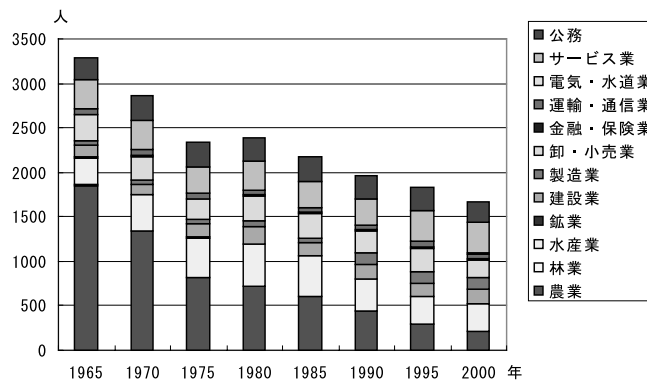


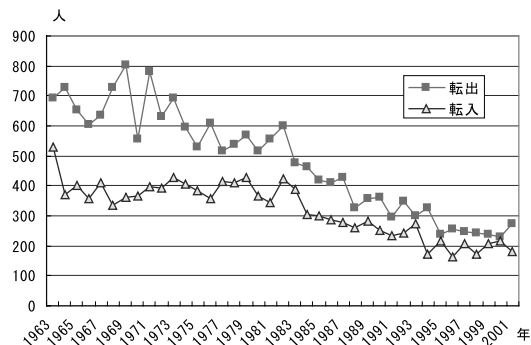
図 2-2 産業別人口の推移



以上のことから、転出者の母村における職業は主に農業であったとすることができよう。<sup>5</sup>

次に、人口の社会動態すなわち転出者と転入者についてみると、1963年以降今日（2001年）まで一貫して転出が転入を上回っており、とくに1960年代から70年代前半の時期に、転出と転入の差すなわち転出者の絶対数が多かったことが読み取れる。この傾向は町全体の人口動向のところで述べたこととほぼ一致している。（図 2-3）

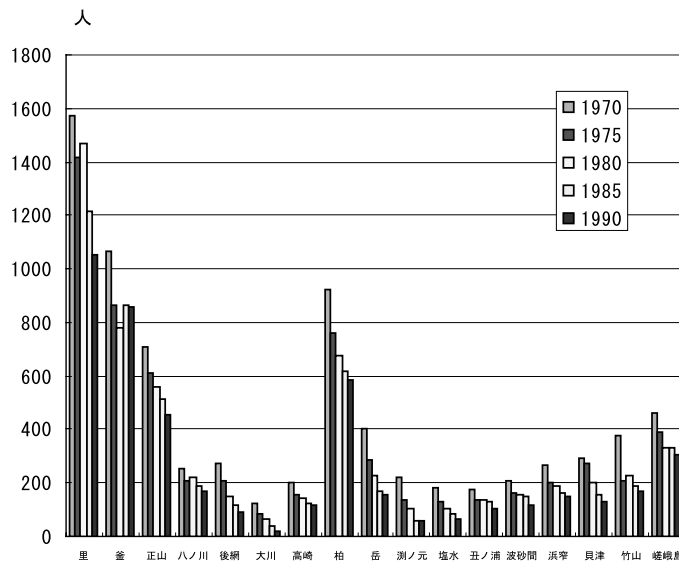
図 2-3 人口の社会動態



また、この図を10年単位でまとめてみると、60年代、70年代、80年代、90年代の順に絶対的転出者が多かったと読み取れるように思う。すなわち、転出者の絶対数は減っては来ていると言えよう。

次に、町内の地区（集落）別に人口動向を見よう。資料の制約から、全集落で把握できるのは1970～90年の間である。（図2-4）

図2-4 各地区の人口の推移（1970～1990年）



この図で、1990年の1970年に対する減少率を計算すると、表2-1のようになる。

表2-1 三井楽町の集落人口減少率

地区	1970	1975	1980	1985	1990	減少率(90/70) %
里	1573	1417	1469	1214	1051	66.8
釜	1064	867	783	867	858	80.6
正山	707	609	561	514	452	63.9
八ノ川	255	209	223	191	167	65.5
後網	270	210	148	116	91	33.7
大川	121	83	65	37	21	17.4
高崎	199	156	143	121	117	58.8
柏	921	762	679	618	588	63.2
岳	406	288	229	166	154	37.9
淵ノ元	222	138	102	58	60	27.0
塩水	182	130	104	87	68	37.4
丑ノ浦	173	139	138	130	101	58.4
波砂間	206	162	159	147	118	57.3
浜窄	266	201	190	163	149	56.0
貝津	292	275	200	154	133	45.5
竹山	377	206	225	190	166	44.0
嵯峨島	461	387	333	329	305	66.2

この中で減少率の高い6位までの集落すなわち1大川17.4%、2淵ノ元27.0%、3後網33.7%、4塩水37.4%、5岳37.9%、6竹山44.0%、はすべて、18世紀の後半以降に大村領等から移住したカトリック信者の移住者集落で、仕事も塩水と後網の半農半漁以外は、ほとんど農業を主としていることが共通している。<sup>6</sup>

ところで、カトリック教徒の移住者集落でなぜ減少率が高いのだろうか。1つ考えられることは、来住時に良地が既住者のものとなっていて残っておらず、条件の悪い土地であったということである。

しかし、より新しい明治期の移民によって成立した高崎集落は、減少率がそれほど高くない。これは、集落の約半数は漁業を中心とした仏教徒が構成しているためであると考えられる。

従って、移住の早い遅いという時期の要因よりも、依存する産業が農業か漁業かという要因の方が人口減少率に大きく影響しているということであろう。カトリック教徒の集落はそのほとんどが農業集落であったために、農業の衰退とともに人口の流出を余儀なくされたのであろう。

以上の議論は1970～90年の間の減少率であった。次に、資料の得られる6集落について、1950～90年の間の人口減少率について考察する。(図2-5)(図2-6)

図2-5 6集落の人口の推移(1950～1990年)

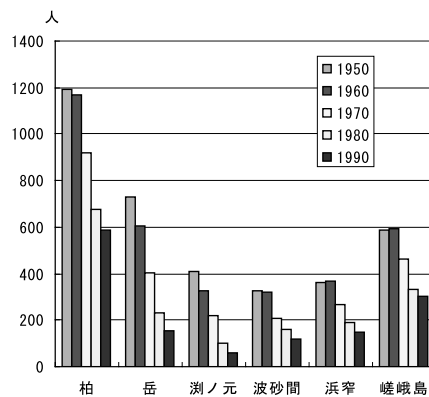
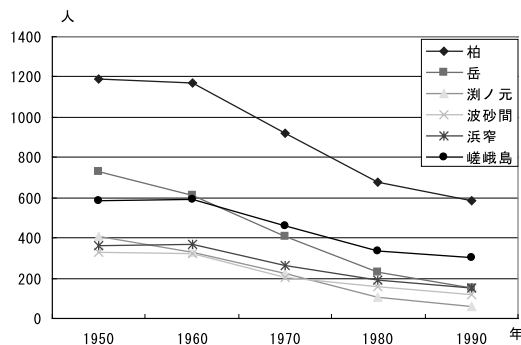


図2-6 6集落の人口の推移(1950～1990年)



これらの図の1950年と90年の間の減少率をみると、1 淵ノ元14.7%，2 岳21.2%，3 波砂間36.1%，4 浜窄40.9%，5 柏49.4%，6 嵯峨島52.0%となり、カトリック教徒の農業集落である淵ノ元と岳は、他の4集落と比べて減少率がとりわけ高いことが示されている。(表2-2)

以上のことから、人口減少がより顕著であった1950～1990年の時期の特徴も、1970～1990年の前者と同様の傾向であると言えよう。

表 2-2 1950～1990年の6集落の人口減少率

地区	1950	1960	1970	1980	1990	減少率(90/50) %
柏	1190	1169	921	679	588	49.4
岳	728	608	406	229	154	21.2
淵ノ元	408	326	222	102	60	14.7
波砂間	327	323	206	159	118	36.1
浜窄	364	365	266	190	149	40.9
嵯峨島	586	591	461	333	305	52.0

## 第2節 出郷者の全国的状況と各地三井楽会の成立

前節では、旧三井楽町からの人口流出状況を見た。ところで、この転出者の総数はどのくらいになるのでしょうか。転出、転入を示した図からこれを計算してみると、1963年から2001年までの転出者の絶対数は6,268人であった。もちろん1963年以前にも転出者はいたであろうが、これについては把握できない。

この約6,000人という数字はピーク時の約1万人から現在の約4,000人を引いた数字に近い。ピーク時の55年と転出統計の得られる63年の間の人口減少は多少あり（882人）、これを考慮に入れると、三井楽町からの転出者総数は7,000人程度と推定できよう。

では、この7,000人はどこへ移住したのだろうか。

旧役場からの聞き取りによれば、現在三井楽会は4つの都市部に存在する。すなわち、東京、関西、福岡、そして長崎である。この中で会員数の最も多い会は関西三井楽会で、正確な数はわからないが、東京より多いという。東京三井楽会が2番目に多い会で、その数は294名である。従って、関西三井楽会の会員数は300名以上ということになる。

3番目は長崎で、その会員数は正確にはわからないが、200人位ではないかということであった。また、会に入っていない出身者も多いということであった。

4番目は福岡で、会員数は100名位ではないかということである。

以上をまとめると、関西が300人以上、東京約300人、長崎約200人、福岡約100人となり、関西以外で600人、関西を400人とすると1,000人程度となり、先に見た流出者7,000人の1/7程度が会に結集しているということになる。しかし、この点については、のちに全国の三井楽会についてより詳しくふれた後で再検討することにしたい。

支庁での聴き取りによると、三井楽出身者は第2次大戦後大阪へ出た者が多いという。すなわち戦後の食糧難の時代に一家全員で、つまり挙家離村の形態で、大阪府の泉南地方へ紡績関係の仕事で転出したケースが多く、とくに、泉南市、泉佐野市、堺市に多いという。（関西転出者の居住地については、後の関西三井楽会の部分で触れる。）

また、会の活動の内容は大阪、長崎、福岡など各地とも若い人が少なく、目立った活動もしておらず、情報交換が中心で、町の広報を会員数まとめて会長に送ったり、総会の時に町長、議長、総務課長が海産物などを持って出席したりしていたと言う。合併で三井楽町がなくなったので、今後どうなるか心配だという話であった。

ここで、合併以前となり町であった旧岐宿町の出身者で作られている岐宿会についても、三井楽会を補強する意味で多少付け加えておくことにする。

岐宿支所からの聴き取りによれば、岐宿会は東京、関西、長崎にあるが、福岡にはないと言う。会員数は東京が約400人で、関西は東京より多いが、どの程度かは不明。長崎は約200人である。三井楽と比べると、長崎の会員数は同じであり、東京の会員数は多いが福岡に存在しないので、形は違うが同程度と言えるかも知れない。

岐宿人の行き先で最大の関西では、2つの中心があり、1つは神戸、もう1つは泉大津などの泉南で、泉南へはやはり紡績関係の仕事で転出している。他方、神戸の方は戦前、古くは大正時代から外人奉公の職で転出しており、ここへの転出者は岐宿の中でも川原（かわら）地区という1つの大字が中心になっており、先駆者の存在が予測される。

関西に岐宿会ができたのは比較的最近（約10年程前）で、当時は岐宿町の町おこしで町の産物であるバレイショやイカ類などをふるさと便で神戸に送っていた。こうした中で直行便開設運動が起こり、これらの運動の中で関西岐宿会が作られ、年1回の親睦を兼ねた総会が行われるようになった。この時は岐宿から町長、議長、総務課長が出席したが、合併で支所となり、送る広報も五島市のものとなるので、「いちまつの寂しさを感じる」ということであった。

なお、「下五島広域市町村組合」なるものが作られて、関西の「五島人会」とともに福江空港と関西を結ぶ直行便を運行する運動が5年間程継続して行われたが、結局、実現はしなかった。

### 第3節 五島人会について

各地の三井楽会について述べる前に、五島全体の出身者の会である五島人会について、ここで触れておきたい。五島人会は東京、関西、長崎に存在する。

東京五島人会について、「五島新聞」に次のような記事がある。<sup>7</sup>

- 1) 1991年12月12日 東京丸の内の日本工業クラブで五島人会総会を開催。約230人が参加。全国町長会に出席した五島1市10町の町長も出席。
- 2) 1998年12月11日 日本工業クラブで総会を開催。約250人が参加。1市10町の町長も出席。
- 3) 1999年12月25日 日本工業クラブで総会を開催。約250人が参加。10人の町長も出席。

五島新聞は1999年で廃刊となったので、その後の動きは不明だが、毎年年末に全国町村会の開催時にあわせて総会を持っているようである。また、東京の会の発足については、大正末に会の前身である「五島クラブ」ができたそうだが、いつ「五島人会」になったのかは不明である。

関西の会は「関西五島人会」と称し、その発足は1994年6月4日と新しい。このきっかけは大阪直行航空便開設運動で、当日、尼崎の中小企業センターに約150人の出席があった。会長は福江市出身者、副会長は各町人会の代表とあるが、「今後未結成の町人会を発足させて組織を強化させ・・・」とあり、また「今月（6月）26日には（中略）東急ホテルで未結成の岐宿人会の発会式が行われる」ともあるので、1市10町のすべてに会が成立していたわけではないことが伺える。その後、直

行便は一時開設されたが、1998年12月に廃止になった。<sup>8</sup>

長崎市の会は「長崎市五島人会」と称している。この発足は、三井楽出身の久保勘一氏が参議院選挙に出馬し、また、県知事選挙にも出て当選（1970年）した直後の頃に、「五島人クラブ」が結成され、これが母体となっている。五島の各町の出身者毎に世話人を設け、1969年頃には松山グラウンド（長崎市営陸上競技場）で大運動会を開催し、3,000人も集まり、また、翌年開催した総会にも300～350人が集まって、大盛況であった。当時は大運動会を2年に1回行っていたが、今は3年に1回になっている。また、総会は運動会の時にあわせて行っている。この他、五島人会としてソフトボール大会をすることもある。

ここで、大運動会についてももう少し詳しく触れておく。日曜日の1日を使って、運動会の競技やアトラクションが行われる。1996年の第8回は、会場も陸上競技場で市町対抗リレー等がメインであったが、2002年の第10回では競技は午前中のみで、午後は歌や踊りのアトラクションに変更しており、会場も体育館で行われた。この準備には相当のエネルギーを使っているようで、例えば長崎三井楽会では各年代別に世話人（三井楽中学校卒業生の各年毎の世話人）を決めて、その年代にはその世話人が働きかけるというやり方をとっており、また、大会プログラムへ広告を出すスポンサーとしての協力の働きかけも、これとは別に行っている。<sup>9</sup>

以上見たように、五島人会は直行便の開設や出身者の候補の選挙での応援など、現実的な要求や利害を基にして結成されるに至ったと言える。また、内容的には地域利害的な要素が強いとも言えるだろう。そして、上部で結成された組織の力が下部に及んでいくという方向の力が働いており、うまく行くと運動会に見られるようにかなりの組織力を発揮するものとなっている。しかし、一旦現実的な要求が後に引き下がると、この組織の力も後退の傾向が生まれる。運動会の内容の変化がこれを示していると言えよう。

### 第3章 全国の三井楽会について

先に、全国の三井楽会のおよその規模について、市町での聴き取りに基づいてその概要を述べたが、ここでは各地三井楽会の個別資料すなわち総会記録、会則、会員名簿等に基づき、より詳しく各地三井楽会の状況について捉えてみたい。

#### 第1節 関西三井楽会

まず、最も大きいと考えられる関西三井楽会についてみよう。

始めに会員数をみると、2000年10月に発行された会員名簿によると、住所のわかっている会員が932名、住所のわからない会員が97名、合計1,029名となっており、前述した支所からの聴き取りによる「東京より多い」の実態は、東京が300名程だったのでこれよりずっと多いということになる。

会の発足年は不明であるが、1996年から「ふるさと大使」という制度を設けて、会員の中の数名をこれに指名しており、この頃会が活性化したことは確かなようである。当時は直行便開設運動で、会が盛り上がっていた頃でもある。会の発足もこの頃だったのかも知れない。

会則によると、会の目的は「親睦」と「郷土の発展に寄与すること」の2つであり、会の事業のところでも「郷土との連繋・協力」をあげている。

また、会費は1人年に1,000円である。

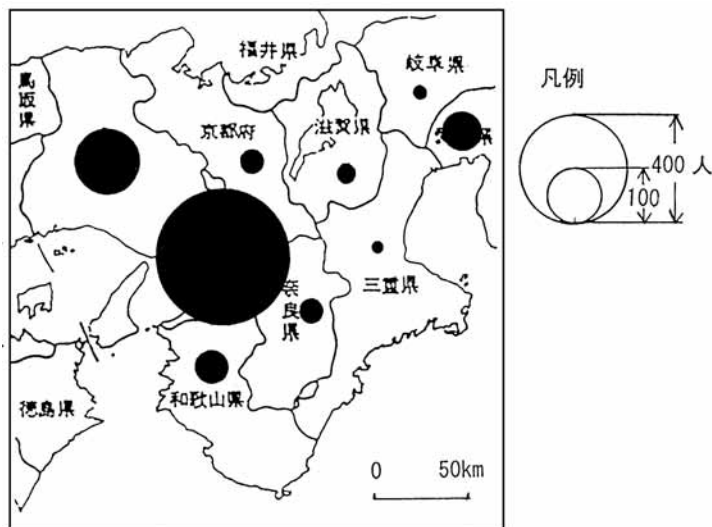
さらに、会を10のブロックに分けているが、この基準は関西における居住地単位ではなく、出身地三井楽の集落を基礎としたもので、出身地での人のつながりをより基本にしていることが伺える。

次に、ここで地域的視点に関わる2つの作業を、会員名簿に依拠して行ってみたい。1つは三井楽出身者（会員）が関西のどこに多いのかの解明であり、もう1つは関西の会員は郷里三井楽のどの集落からの者が多いのかという点の解明である。

前者については、前述のごとく泉南に多いのではないかという仮説が既に存在する。これの検証ということになる。後者については、母村の集落規模によるある主の補正が必要であろうが、この点を考慮した上で、農業集落、漁業集落、キリシタン移住集落か否か等の要素がどのように絡み合っているかの探究・検討ということになる。

まず、前者の結果を示そう。関西三井楽会の会員名簿には1,029名の名前があるが、このうち住所の記載のある会員数は932名である。これをまず府県別に見ると、大阪府が642人と7割近くを占めて断然多い。次いで、兵庫県の158人、愛知県の48人、和歌山県の33人と続く。距離的に離れている愛知県が兵庫県を除く近畿地方の諸県よりも多いことがやや注目されよう。(図3-1)(表3-1)

図3-1 居住地（府県）別関西三井楽会会員数



次に、最大であった大阪府内をみると、仮説の通り泉南地方に多い傾向が出ていると言えるであろう。ただ、北東部でも必ずしも少ないとは言えないことも示されている。これは、戦後の当初は

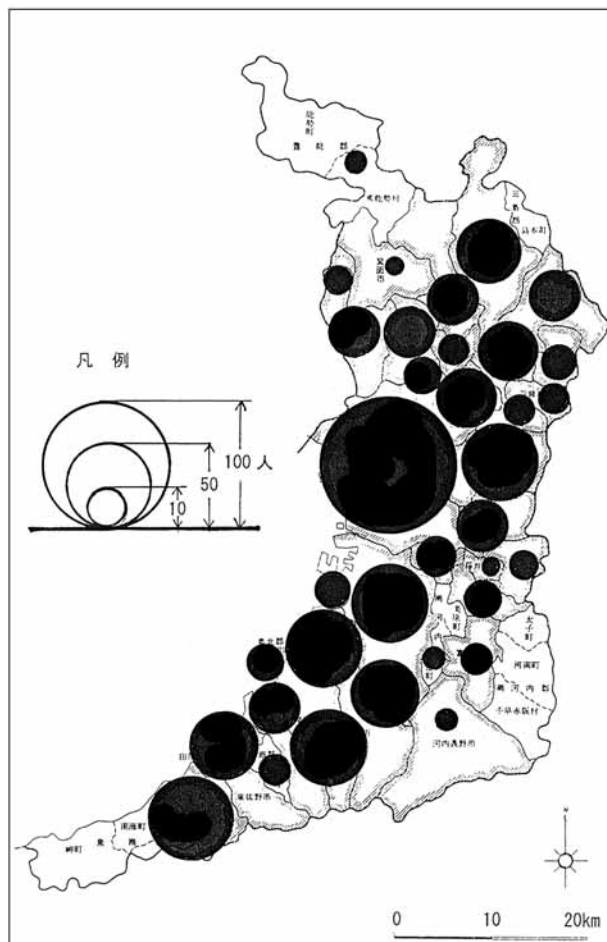
表 3-1 居住地（府県）別関西三井楽会会員数

府県名	会員数(人)	割合(%)
大阪府	642	68.9
兵庫県	158	17.0
愛知県	48	5.2
和歌山県	33	3.5
奈良県	16	1.7
京都府	15	1.6
滋賀県	8	0.9
岐阜県	4	0.4
三重県	3	0.3
岡山県	1	0.1
広島県	1	0.1
鳥取県	1	0.1
島根県	1	0.1
山口県	1	0.1
合計	932	100.0

居住地がもっと泉南に集中していたが、時とともに次第にその居住地を広げ、今日に至っているからではなかろうか。今日でも泉南市は大阪市に次いで多く、堺市や泉佐野市も上位を占めている。

(図3-2)

図 3-2 居住地（大阪府内）別関西三井楽会会員数



なお、前図で関西地方では兵庫県に次いで和歌山県が多かったのも、泉南からの移住であると考えられる。また、愛知県が多いのも、繊維産業と言う同職の関係ではなかろうか。

次に、後者の結果を示そう。始めにこの表の限界について触れておく。それは、会員総数1,029名のうち、出身集落の記入のある会員数は544名のみであり、約53%しかわからないということである。このことを踏まえた上で結果をみると、絶対数では、里84、柏81と、この2つが飛び抜けて多く、釜、岳、竹山、貝津、正山、淵ノ元などが続いている。

しかし、もともとの集落規模に大小があるので、その補正を行う必要があろう。そこで、これらの数の2003年7月の各集落人口に対する割合を計算した結果をも示した。これによると、相対的には淵ノ元が最も多く転出しており、以下、塩水、岳、大川、竹山などの順となっている。(表3-2)

表3-2 出身集落別関西三井楽会会員数  
(絶対数と集落規模による補正)

集落名	会員数(人)	03年の人口(人)	割合(%)
里	84	850	9.9
釜	48	721	6.7
正山	38	422	9.0
八ノ川	17	137	12.4
後網	21	99	21.2
大川	10	29	34.5
高崎	15	83	18.1
柏	81	480	16.9
岳	46	123	37.4
淵ノ元	34	36	94.4
塩水	22	53	41.5
丑ノ浦	12	66	18.2
波砂間	17	121	14.0
浜窄	18	141	12.8
貝津	39	121	32.2
竹山	42	126	33.3
嵯峨島	0	237	0.0
計	544	3845	100.0

ところで、これらの集落は皆、江戸時代に県本土の大村地方などから移住したカトリック教徒の集落で、主に農業に依存していたことが共通している。(図3-3)

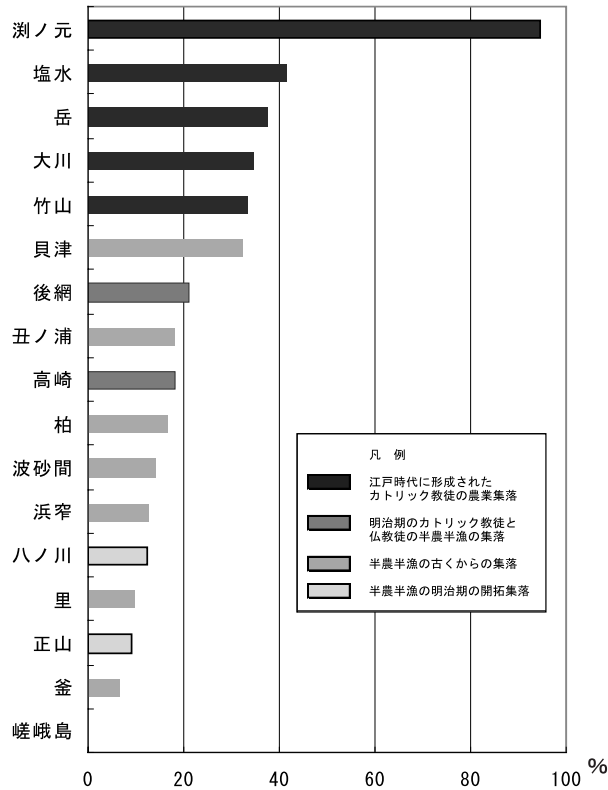
カトリック集落で転出がやや少ないのは後網であるが、後網は同じカトリック集落でも形成時期が明治期で、前述のごとく漁業を営む仏教徒を含む点が、他のカトリック集落と異なっている。なお、高崎も後網と同様の性格を持つ集落であることは前述した。これら以外は半農半漁の古い集落であるが、八ノ川と正山の2つは明治期の開拓集落である。

結局、農業の衰退が、基盤も弱く、ほぼ農業に依拠していたカトリック集落の人口流出を大きく引き起こしたということであろう。

## 第2節 東京三井楽会

次に、東京三井楽会についてみよう。会の設立年は不明だが、会員数は2003年度の名簿によれば、314名である。年に1回総会を行っているが、その出席者数は80数名程度というので、活発な会と言えよう。

図 3-3 出身集落別関西三井楽会会員数（集落規模による補正）



総会では他地区の三井楽会と同様、郷里の代表や各地区三井楽会の代表等も参加し、また、三井楽の獅子舞青年団（7名）による獅子舞などの演技も行われる。

会員の居住地分布を都県別に見ると、神奈川県37.6%、東京都33.3%と、この2都県で70%を超える。次いで、埼玉県12.2%、千葉県8.6%、静岡県3.6%、茨城県2.0%などとなっている。（表3-3）首都圏の西方に多いのは長崎が西方だからなのか、それとも勤務地との関係なのかは不明であるが、興味ある現象と言えよう。

表 3-3 居住地（都県）別東京三井楽会会員数

都県名	会員数(人)	割合(%)
神奈川県	114	37.6
東京都	101	33.3
埼玉県	37	12.2
千葉県	26	8.6
静岡県	11	3.6
茨城県	6	2.0
長野県	2	0.7
群馬県	1	0.3
栃木県	1	0.3
その他	4	1.3
小計	303	100.0
不明	11	
合計	314	

また、東京三井楽会会員は三井楽のどの集落の者が多いかについてみると、絶対数では柏27、里24、釜23などが多いが、これらの集落はもともと母村の規模が大きい集落である。そこで、母村の規模を考慮すると、相対的には浜窄9.2%、波砂間6.6%、八ノ川5.8%、塩水5.7%、柏5.6%などが多く、逆に少ない集落は後網0.0%、嵯峨島0.4%、岳2.4%、高崎2.4%などである。多い集落は塩水を除くと半農半漁の古くからの集落であり、関西の場合とは逆の傾向があるようにも思えるが、会員の絶対数が少ないので断定的なことは言えないであろう。(表3-4) また、この表は東京三井楽会会員314人のうち、出身集落のわかっている139人(44.3%)のみのデータから作成されており、こうした限界があることをも踏まえておくべきであろう。

なお、東京三井楽会は名誉会長を1人設けており、これはヤクルト社長のM氏である。東京三井楽会はこうした成功者をシンボリックに中心に据えている会であると言えそうである。

表3-4 出身集落別東京三井楽会会員数  
(絶対数と集落規模による補正)

集落名	会員数(人)	03年の人口(人)	割合(%)
里	24	850	2.8
釜	23	721	3.2
正山	11	422	2.6
八ノ川	8	137	5.8
後網	0	99	0.0
大川	1	29	3.4
高崎	2	83	2.4
柏	27	480	5.6
岳	3	123	2.4
淵ノ元	1	36	2.8
塩水	3	53	5.7
丑ノ浦	3	66	4.5
波砂間	8	121	6.6
浜窄	13	141	9.2
貝津	5	121	4.1
竹山	6	126	4.8
嵯峨島	1	237	0.4
計	139	3845	

### 第3節 福岡三井楽会

ここで、福岡の会についてふれておく。福岡三井楽会は5年程前に設立された。そのきっかけは、郷里三井楽町の振興のための物産展を福岡で開くことになり、その協力母体としてできたそうである。

2002年に開催された総会・懇親会では、来賓を含めて約60名の参加があり、郷里の町長、議長等の他、各地三井楽会の代表等が参加し、郷里の青年団8人による郷土芸能の獅子舞の演技も行われた。

会員名簿は入手していないが、この会の案内状は290名に送られており、この数に近い出身者(会員)が福岡周辺に居住しているものと思われる。会員の居住地分布はわからないが、この会の出席者の居住地をみると、福岡市、大野城市、北九州市などが多くなっている。

#### 第4節 長崎三井楽会

最後に長崎三井楽会について述べる。現在の正式名称は長崎三井楽町人会で、会の設立は1950年頃に遡るが、会が活発になったのは町出身の久保氏が1970年に県知事選挙で当選した前後からである。これ以後、前述のごとく五島人会主催の大運動会が当時は2年に1回開催され、三井楽会は福江市、若松町の会とともにこれを支える中心的な組織の1つとなったのである。

会員数は会員名簿には800名程の名前があると言われるが、総会・懇親会への実際の参加者は100～150名くらいであると言う。<sup>10</sup>

会の活動は、長崎三井楽会自身の総会・懇親会と五島人会主催の運動会への取り組みの2つが中心となっている。

また、長崎三井楽会で気付くことは、中学校同総会との一体化である。旧三井楽町には離島の嵯峨島中学校を除くと、中学校は三井楽中学校1つであり、町出身者はほぼ全員が三井楽中の同窓生である。離島の嵯峨島中もあるが、その生徒数は三井楽中の1/10以下である。

長崎三井楽会では会長の他に副会長を4人置いているが、これを町に4つある小学校校区から1人ずつ選出している。すなわち副会長は小学校の同窓生で担当することになるのである。<sup>11</sup>

長崎三井楽会は三井楽中学校の同総会とメンバーがほぼ一体化していることを活用して、若い卒業生をうまく会に引き入れている。長崎市にある他の町の会は「老人クラブのようだ」と言われる中で、三井楽会は若い者の活躍が目立っている。また、中学校の同総会を行う場所も、郷里ではなく長崎市内である。先に、会員名簿には800人の名があると述べたが、これも中学校の同総会名簿と同じであり、これを会員としているものと思われる。また、名簿も容易にそろえることができるであろう。1町1中学の状況をうまく活用しているのだと言えよう。

以上みたように、長崎三井楽会の特色の1つは五島人会との関係が強いことであり、もう1つは中学校同総会をうまく活用していることの2点に求められる。

### 第4章 まとめと考察

#### 第1節 まとめ

以上、各地の三井楽会についてみてきた。関西と福岡はとくに郷里三井楽の発展を掲げ、この実質的な行動が実現していたと言えよう。直行便の開設や物産展の開催等である。これに対し、東京は成功者を中心に置いた活動、長崎はより広域の会（五島人会）との関連が強いように感じられる。

一般に、会がより広域になればなる程、地縁・血縁的な個々人の結びつきをベースとしながらも、この性格が弱まる傾向があるのではなかろうか。逆に、会が広域になればなる程、これ以外の他の要素、例えば選挙の後援会的な要素、が強くなる傾向があるように思われる。

もちろん、共通したベースは、先に述べた地縁・血縁を土台とする個々人の結びつきである。学

校の同窓会とこれが一致していれば、出身者の会が同窓会やクラス会の性格を付加することになり、個々人の結びつきはより強いものになるだろう。

## 第2節 奄美の会との比較

次に、五島人会や町村レベルの会の一例として今回取り上げた三井楽会を、奄美の出身者の会（郷友会）と比較してみよう。

まず、奄美の出身者の会では、都市部での基本単位として、町村レベルよりも小さい集落（シマ）単位で活動していることが、形態的な側面ではあるが、基本的に異なっていると言える。

そして、このことの持つ意味は実は大変大きいと筆者は考えている。すなわち奄美の集落を基礎とする会は血縁的、地縁的結びつきがより強いのに対し、長崎県五島の町村レベルを基礎とする会は同じく血縁的、地縁的な結びつきを持ちつつも、血縁的な側面は弱くなり、それよりもその時期の現実的な必要事に応じて活動するという要素がより強くなっているように思う。五島人会のようにその規模がさらに大きくなると、前述したように、これらの性格はさらに強くなると言えるだろう。すなわち、地縁的、血縁的な要素はさらに弱くなり、現実の必要に対応する要素がより強くなるのである。

会の活動の内容でもう1つ大きな違いを指摘できる。それは、会の活動内容では、総会や運動会、余興として行われる文化的な行事などはよく似ているのであるが、奄美では敬老会がない郷友会はほとんど考えられないのに対し、五島ではこれを行っている会はほとんどないという違いである。

敬老会すなわち祖先を大切にする精神が奄美では大変強い。筆者も奄美の郷友会での聴き取り調査の中で、「年寄りを慰めるために」とか「年寄りに喜んでもらうために」などの言葉を何度も聞いたことを思い出す。そしてこの要素は奄美の方の血縁的関係の強さの要素とつながっているであろう。敬老とは年寄りだけでなく祖先を大切にするという精神なのであり、さらにより広げて言えば、年長者を敬う精神にもつながっているように思う。

ところで、こうした違いはなぜ生まれるのであろうか。五島と奄美の文化の違いなのだろうか。この点のより深い考察については今後の課題としておきたい。

長崎の出身者の会の検討を通して、感ずることは、人のつながりの強さ、とくに子どもの頃の友人、知人の結びつきの強さである。こうした結びつきの強さが、互いに異質で孤立した個々人が集まる現代社会の都会という場で、その力を発揮することは十分に考えられるし、また、本稿でみたように現実にもその力を発揮しているのである。この力はいわゆる都市化、ゲゼルシャフト化、疎外化が進めば進む程、ますますその力を発揮する条件を獲得するであろうし、逆に言えば、出身者の会の存在が現代社会の問題やあり方を、広い意味で反映したものとなっているとも言えるであろう。

## 注

- 1 叶堂隆三編（2002）：椿の島が実る頃—五島列島久賀島（長崎県福江市）の人・生活・社会に関する調査報告— 福岡国際大学
- 2 三井楽町郷土誌作成委員会（2004）：三井楽町郷土誌（昭和63年度～平成15年度版） 三井楽町
- 3 ここで、ほぼとしたのは例えば三井楽町には三井楽中学校の他に離島の嵯峨島中学校があるからである。
- 4 注2と同じ。
- 5 ただし、農業と言っても半農半漁の集落も少なくなかったことには、注意しておきたい。
- 6 三井楽町（1988）：三井楽町郷土誌 三井楽町
- 7 「五島新聞」は1984年から1999年まで、月3回の発行で16年間続いた。しかし、筆者が閲覧したのは、福江市立図書館所蔵の1991年以降の9年間のみである。
- 8 「五島新聞」1994年6月11日の記事による。
- 9 長崎市五島人会（1996）：第8回長崎市五島人会大運動会プログラム、長崎市五島人会（2002）：第10回長崎市五島人会ふれあい体育祭プログラム、等による。
- 10 前会長氏からの聴き取りによる。他と比べて多すぎるように思われるかも知れないが、その理由は後述する。
- 11 この4つの小学校校区とは三井楽校区（里～後網）、岳校区（大川～淵ノ元）、浜窄校区（塩水～竹山）、嵯峨島校区の4つである。

## 謝 辞

本研究を進めるに当たり、福江市三井楽支庁総務課のS氏、教育委員会、岐宿支庁長氏、長崎三井楽会元会長のM氏には、資料や情報提供で大変お世話になりました。深く感謝致します。なお、本研究では、2003～04年度文部科学省科学研究費「島嶼地帯の県境を越えた市町村合併に関する総合調査——奄美群島を事例として——」（研究代表者：山田誠）の一部を利用した。